
勇者伝説

Sorairo 光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者伝説

【Nコード】

N5455G

【作者名】

Sorairo 光

【あらすじ】

消防士、透樹とおきと、主人公、蘭らんの描く勇者&ラブストーリー

空が赤く染まる頃。
どこかで空が紫になる。
太陽が沈み、月のはのぼる。
輝きを放つ星。
小さな命。
なぜ人は生まれてきたのだろう。

今日も空は曇っていた。
ずっと信じてたよ。
馬鹿みたいに。
あんたがあの日。
私に約束したこと。
「絶対戻ってくるから」って言葉。
でも。何さ。
戻ってなんかこなかったじゃんか。

戻ってきたのは・・・。

あんたの骨だけじゃんかつ！
いやな予感がしたんだ。
何よりも優柔不断なあんたがいきなり約束するなんて言ったんだから。
帰ってきたのは名誉だけ。

讚えられたあんたの最後。

骨が戻ってきただけ・・・いいのかもしれない。
思い出すよ。あの約束の日のことを。

優柔不断なあんたは何よりも火を嫌った。

あんたが火遊びしていた火が、捨ててあった新聞紙にうつって、悪ガキだったあんたたちはうるたえてから逃げた。

火は小さいうちに消し止められたけど・・・。

小さな命が奪われた。

足の悪い、老いた犬。

家族はそれぞれに家を出て。

犬小屋に火がついてもなかなか気付く人もいないままに犬は逃げられずに焼け死んでしまった。

それからというものの、火から命を守ると決めたらしくずっと消防士になると言ってきた。

あんたはよくつぶやいてたよね？

人はなぜ生まれてきたのだろう。って。

しばらくすると不審火災が相次ぐようになり、人が次々と煙にまかれるようになった。

新米のあんたもついに泊まり込みが決まった。

戦争中じゃないんだからって私は思ってた。安心してたよ。

帰ってくるって言い聞かせてた。

「必ず戻ってくるから。たくさん命を救って・・・。」

いきなりそんなこといわれたら不安になるよ？いつもみたいへらへら笑っていつもみたいに軽く。

「いつてきまーす」って言ってよ。

「な。何言ってるの？あつたりまえじゃん？」

笑って？笑ってよ。

けど、笑ってなんかくれない……。

「透樹……？」

思わず服にしがみついたよ？ 遺言みたいに言うから。

あの時初めてあんなにも透樹が遠いと感じた。

「大丈夫。ちゃんと戻ってくるから。」

そういつて透樹は私を抱き締めてすぐ離してからほほえんだ。

でも声は、いつもよりずっとしっかりしてた。

「絶対だよ？ 約束だよ？ いきなり遠くに行くなんて……なしだよ？」

「うん。だから。泣くなよ。ほら。な？ 蘭」

「なっ。泣いてないっ！」

「強がり蘭子強がり蘭ちゃん。」

「こっ。こらあっ！ 早くいつてこいっ！」

玄関先で意味不明な動きを続ける透樹に向かって私は叫んだ。

「はいはい。」

「透樹……？」

「ん？」

「いつてらっしやい……。」

絶対約束守ってね？ 早く帰ってきてね？

「……いつてきます。」

最後に交わした言葉は。やっぱりふざけあってるみたいだった。

あんたは私に確かさというものをなかなかくれないから。

いつも……。

私があんたとの関係を幼なじみ以上にいけなかった理由……。

高校からずっと一緒にいた。

気持ちを伝えることもできなくて。

いい感じになってもあんたの優柔不断でいつつもはぐらかされてきた。

だからお互いに別々のカレ、カノを作った。

それでも離れなかった私たち。

ほとんどいつもと違ってもいいくらい。相手を換えても……。ダブルデートだったよね？

何度こんな日が続くんだろうと思った。

何度こんな思いをしなくてはいけないんだろうって。

「好き……。」

涙がこぼれる。

現実痛い。

現実ってひどいよね……。

気付けばいつもあんたが私の隣にいた。

気付けばいつも好きだった。

あんたは、私のことどう思ってたの……？

約束してから私は毎日テレビを見た。

そして初めての不審火災が起こってから一カ月。

あんたが私の前から消えてから21日半を数えた頃。

あんたは勇者になった……。

足の悪いお婆さん……。

半分もう助けにいけない状況の中であんた（とおき）は決してあきらめなかった。

そしてお婆さんを救い出したシーン。

今でも目に焼き付いてる。

消防マスクをとったあんたの顔は所々すすだらけで、汗をびっしょり掻いて何か話していた。

私は涙目になりながら勇者を見た。

勇者の名は、透樹。

優柔不断な男。

高校を卒業して二十歳になった今も、一緒にいた。

もう危ないことはしないでほしい……。でも透樹は次々に榮譽を築き上げていく。

そのたびどれだけハラハラさせられるかわからない……。ついに不審火災1回目から2カ月と半。

透樹がいなくなつて56日目。

そして英雄になつてから35日目。

放火魔が捕まつた。

飛び上がつて喜んだ。

やつと……。

やつと透樹が帰つてくるつて……。

なのに。

不審火はとまらない。

次々に人が焼け出されていく。

あつちでも。こつちでも。

もはや一人じゃできない範囲までに不審火は燃え広がっていた。

犯人が捕まつてから11日目。

犯人は一行に口を割らない。

でも徐々に不審火は減つてきていた。

野原が焼ける。今日も空が曇る。

火災の煙か曇っているのかはもうわからない。

何で犯人は捕まつたのに火災は納まらないの？

何で犯人は捕まつたのに透樹は帰つてこないの？

帰つてきてよ。

「透樹……。」

つぶやき声は淋しさを増すばかり……。

淋しい音色は一粒の波紋を作り、その波紋は徐々に広がっていく。

音をたて、音を揺らし、波をたて、消えることない永遠の波紋。

そして三人目の犯人が逮捕され、その2日後に火災で駆け付けた透樹。

あんたは……。

この日。

死んだ……。

最後まで英雄として。

足の悪い犬を抱えたまま透樹は私のいけないところへ逝ってしまっ
た……。

「透……樹……？」

帰りの遅いあんたを呼んでもテレビは反応しちゃくれない。

透樹がいなくなってからもう186日がすぎようとしていた。

そして、あんたが勇者になって165日あまりがすぎようとしてい
た。

透樹が守った命は透樹の腕の中でちゃんと生命の炎を灯していたと
いう。

英雄の死……。

次の日の朝に私は事実を知る。

。どのニュースにもデカデカとのった悲しみの勇者伝説の始まり……

そして透樹が逝ってから8日目。

私の家は火災にあった。

自暴自棄になつてた。君の元へ逝こうと思つた。きつと今なら逝ける。

あんからもらつた大切なもの、色々抱き締めて。

煙の中で眠るように私は動かなくなつた。

馬鹿だね……。

透樹は。

あの時の犬と重なつたから足の悪いあの犬を助けたんでしょう？
涙が落ちる。

でももう何もわからない。

自分が泣いたとわかつたのはずっとあとのことだ……。

目を覚ますとそこは騒がしいただの白い部屋だつた。

たまに茶色が目につく。

何で私、生きてるんだろう？

若い消防士が一人私のそばにいた。

「あ。目、覚めました？ 蘭さんですよ？ 俺、透樹の同僚で透樹から蘭さんのことよく聞いてたんで……。」

「私、何で生きてるの？」

もはや口から漏れた言葉は自分の声ではない。擦れ、低くなり、小さい声。

「え？ ああ、蘭さん危機一髪つてゆーか、ずっと今まで寝てたんですよ。丸々一日寝るかと思つたのに早いですね。」

「死なせてくれればよかったのに……。」

「え？」

「死なせてくれればよかったのに！ ここにいたつて透樹は帰ってこないのにつ！ ックウ！ ゴホッゴホッ！ ッツ！ ウェッ。」

自分の手に付いた“それ”は、黒く、すすの匂いがした。

「おわっ！大丈夫ですか？」

「ゴホッゴホッゲホッ！」

喉が痛い。苦しい……。

「おわっ。ナースコールッ！」

ブチッ。

「はい。」

機械から音が漏れる。

「すみませんっ！坂口さかくち 蘭さんの意識が戻ったんですけど、今咳き

込んで苦しそうなんですよっ！」

「ゲホッガッ！ヒュー……。ヒュー……。」

まともに息ができない。引き裂かれそうな喉の痛み。

「何か特徴はありますか？」

「痰たんがつ！唾たが黒いです！」

「わかりました。すぐいきます。」

至って冷静なナースの声。

「ヒュー……。ヒュー……。」

駆け付けたナースと医師。

「これは。ガスの吸い込みすぎですね……。」

その後、高熱が続き、数週間うなされ続けた。

確かにあなたの言ってたとおり火を嫌いになりそうだ。

透樹は伝説になる。

私は悲劇のヒロインになる。

そして今。

「伝説なんか……。いらなかったのに……。馬鹿。」

あなたとの思い出も、家も消えた。

アパートだったから透樹の部屋も私のすべても。

「約束したじゃん。あれから私があ約束信じて指折り数えて待っ

てるなんて考えもしなかった？」

君の笑顔はどこにもない。

私も笑い顔を忘れた。もう、寝もしない食べもしない何もしない生活が何日続いたんだろう？

とうに犯人は全員捕まって、とうに透樹は忘れ去られた。

・・・伝説だけを残して。

燃えた家と勇者の幼なじみということで政府からの援助があつて私は何もなかった。ただ広い白い部屋に座り込んでいることしかできない。もしかしたらまだ1週間もたつてないのかもしれない。

もしかしたらもう何年も過ぎたのかもしれない。

もう、私にはわからない。

ピンポーン。

無視・・・。

ピンポーン。

ピンポーン。

ピンポーン。

あまりにもしつこいのでゆらりと立ち上がり、ドアを開ける。

「はい。」

扉を開けると。

「透樹・・・？」

あの、ずっと会いたかった私の大好きな・・・透樹なの？

「うん。約束。まもろーって。」

「何・・・馬鹿いつて。っ。そうだよ。できない約束なんかしないですよ・・・！」

『ごめん。帰ったら伝えたいことあつたんだ。』

「何？」

『さあな？』

ほらまた。

はぐらかす。私に何の確かさもくれないままで・・・。

「ひどいよ。ばか。馬鹿透樹・・・。」

『笑えよ？今までみたいに笑え。笑ってるおまえのほうがいい。』
「うん……。」

『あ。もうダメだ。ここにいらねーや。バイバイ。』
だんだん薄くなる。

「あっ！」

いかないで。私まだ何も……！

そして透樹^{あんた}は、消えてしまった。

勇者になんか……。ならなくてよかったのに。

伝説なんていらなかったのに。

でもありがとう。大好きだよ。

コッソん……。

天から振ってきたその、何か……。

……？

指輪？

そうだ……。昔もらったおもちやの指輪。ただの色付きセロフア
ンを丸めて細くしただけのシンプルすぎる指輪。

……。火災で焼けたはずの指輪……。

うん。もう嘆くのはやめよう。前を向いて歩こう。

この指輪で。きっといつまでもつながってる。

きつとずっと……。

ずっと大好きだよ……。

透樹……。

コノ オモイ ハ ヤッパリ アンタ ニハ ツタワンナカッタ
ケド…… カッコイイ ジャン？ ユウシヤ サマ。

タトエ セカイ ジユウノ ダレモガ アンタ ヲ ワスレテモ、
ワタシ ハ アンタ ト、 アンタ ノ デンセツ ヲ ゼツ
タイ ニ ワスレタリ ハ シナイカラ。

カズカズ ノ ユウシャ デンセツ。

ユウシャ ニ ナンカ ナラナクテ ヨカッタノニ……。

イツモ ミタイ ニ ヘラヘラ ワラツテ、 ワタシ ノ ソバ

ニ イテクレタラ、 ソレダケデモ ワタシ ハ ヨカッタ
ノニ。

アンタ ハ、 カナシキ ユウシャ ニ ナッタ。

ドウセ ナラ、 イキテル ユウシャ ヤ、 デンセツ デ

イテホシ カッタヨ？ ワラ。

ソレ ハ、 チョット ゼイタク スギル カナ？

デモ、 ワタシ ハ ソレダケ アンタ ノ チカク ニ イタ
カッタ。

ソレダケ アンタ ニ チカク ニ イテ ホシカッタ。

ネエ？ アンタ ガ サイゴ ニ ワタシ ニ ツタエヨウト

シテクレタ コト ハ、 ナンダッタ ノ？

モシカシタラ、 サイショ カラ カエレナイ キ デ イタノ
？

コノ カナシミ ハ イツシヨウ ワスレナイ。

ダケド、 コノ カナシミ ヲ ツギ ニ イカシテ ワタシ

ハ マエ ヲ ムイテ アルイテ イクヨ。

コノ キミ ガ クレタ ユビワ ト トモニ……。

(後書き)

読んでくださった方々、ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5455g/>

勇者伝説

2010年10月20日19時26分発行